

佐賀天文

1988

No.8



佐賀天文協会

★ 目 次 ★

1. 見上げてごらん春の星（上）	古賀 利幸	p. 1~4
2. ドブソニアン 個人輸入始末記 （なんとって 44cm）	副島 勉	p. 5~7
3. 葉隠と天文現象 その1	園田 正樹	p. 8~13
4. TANABATA	Silvana Eccles	p. 14
5. 佐賀天文協会主催行事開催報告	副島 勉	p. 15
6. 編集後記	園田 正樹	p. 15

表紙：佐賀天文協会所有の44cmドブソニアン望遠鏡、一緒に写っているのは城北中学校の天文部のメンバーです。右端の人はクラブ顧問の内川先生（もちろん佐賀天文協会のメンバー）、他の方は生徒の御父兄です。

撮影地／金立山山頂付近

撮影者／副島勉

この数年
国体夏期
と思いま
く欠けた
皆既日食
ような天
が設置さ
ここでう

まず春
んのなか
一緒にさ
頃の午後
まで昇っ
すでに
れたもの
れ、その
見られて
利用して
ろにある
小熊座で
向きです
の一方か
の船頭等
す。

「獅子
ます。獅
子といわ
くに来ま
最大光輝
頃には三

「乙女

見上げてごらん春の星(上)

古賀利幸

この数年、ハレー彗星接近や火星の準接近に続き沖縄では金環食が見られ、おりしも国体夏期大会ともかさなり、天文マニアでなくともこの壮大なドラマを見た方も多いと思います。沖縄金環食の際に全国的には部分日食が見られ、佐賀においても8割近く欠けた太陽の姿を見ることが出来ました。また今年の3月18日には小笠原近海で皆既日食が見られ、その際佐賀でも引き続き部分日食を見ることが出来ます。以上のような天文現象もさる事ながら最近是全国的に大型の天体望遠鏡プラネタリウムなどが設置されて宇宙時代の幕開けも始まりつつある予感を感じずにはおられません。そこでこういった時の参考に少しでもなればと思い星の話を書いてみたいと思います。

まず春の北の空に見えるのはなんといっても「北斗七星」でしょう。この星々皆さんのなかには小学生の頃北極星を見つける時の目安として学習したかたや子供さんと一緒にさがした方もあると思います。この北斗七星は大ぐま座の中にあり、3月の中頃の午後8時頃は東北の空に30度位昇っていますが5月の中頃ともなると頭の上にまで昇ってきます。

すでにごぞんじの方も多いと思いますが星座の名前はギリシャの神話から名付けられたものが多く、この大熊座も大神ゼウスを小熊(座)と共に育てた2匹の熊といわれ、その功で星にかざられたといわれています。実際に見た感じでは日本や中国等で見られているようにひしゃくの形に見た方が無理がないようです。なお、この星座を利用して真北を知りたい時はひしゃくの形をした四辺形の先端の長さを5倍したところにある北極星をみつければ容易に知ることが出来ます。その北極星のあるところが小熊座です。形はちょうど北斗七星を小型にした形をしていて向きは大熊座と反対の向きです。そのひしゃくのえの先端が北極星で真北の方向となるわけで、地球の地軸の一方がこの星の方向を向いているので常に一定の位置を動きません。古来から日本の船頭等では「子(ぬ)の星」又は「北の一つ星」と呼ばれ重要視されて来たそうです。

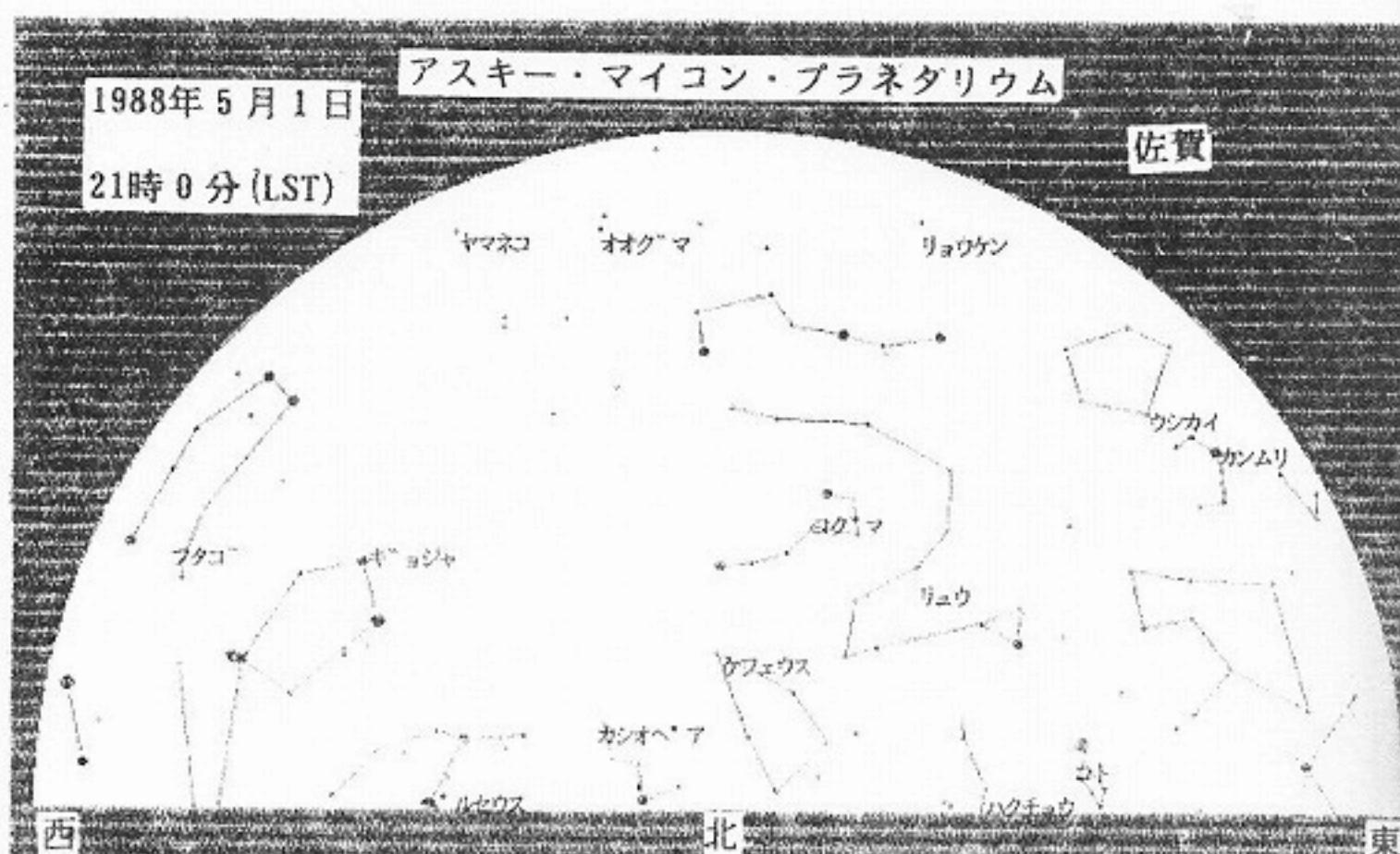
「獅子座」 この大小の熊の星座の南側には西向きになった巨大な獅子の姿があります。獅子座です。ギリシャ神話ではヘラクレスと云う大力持ちに退治された人喰獅子といわれています。この獅子座は、4月の終り頃から5月の初めにかけて頭の上近くに来ます。この4月、5月は金星が一番観望するのに良い時期となり5月7日には最大光輝となり、夕方の西空に輝いて見えます。小型望遠鏡で見ると特に5月の初め頃には三日月型に見えます。

「乙女座」 この星座は獅子座の東側にあります。ギリシャ神話によれば正義の女

神とも、又べつの神話によれば農業の女神デーメーテルともいわれ、星座絵では女神が左手に麦の穂を持った絵が描かれています。この星座で一番明るい星はスピカと呼ばれていますが、それは麦の穂という意味だそうです。この星座には星雲が1万個以上も集まった大集団があります。この星雲というのは我々太陽のような星やガスが数十億個と集合してそれが非常に遠くから見ると雲のように見えることから星雲というのですが、それ等の巨大な集合ですから驚きではありませんか。ちなみに太陽は地球の100倍もあります。まことに気のとおくなる話です。そのように超巨大な集合ですが、その星雲団から発した光が3,100万年かかって今我々に到達しているのです。

ここで一寸天文学で距離の単位としてよく使用する光年について説明しますと、光は1秒間に30万Kmの速さで進みます。言い換えると1秒間に地球を7回転半することが出来るのです。それが1年間かかって到達する距離を1光年というわけです。ですから3,100万年かかって地球に到着しているということは3,100光年というわけです。このような距離になりますと、いかに超巨大であってもこれ等の星のいくつかは小型の天体望遠鏡でかすかに見える程です。然し以上のことは宇宙の構造を考える上では重要なことからですので記憶にとどめておいて下さい。

「かに座」しし座の頭の西側にかに座があります。まずこの星座の神話はあの大英雄ヘラクレスが怪物ヒドラ（水蛇）を次の目標として退治に来た時にヒドラに味方してヘラクレスの足をはさもうといたがかえって踏みつぶされてしまったとされるカニでヘラクレスを憎んでいる女神ヘーラが空に星座としてかかげたとされています。この星座の中にM44プレセペ星団という星のかたまりがあります。この星団のことをイギリスではビーハイブつまりミツバチの巣というそうですが、双眼鏡等で見ると本当にミツバチが群がっているような感じを見ることが出来ます。星座そのものは「かに」のような感じには見えない様です。



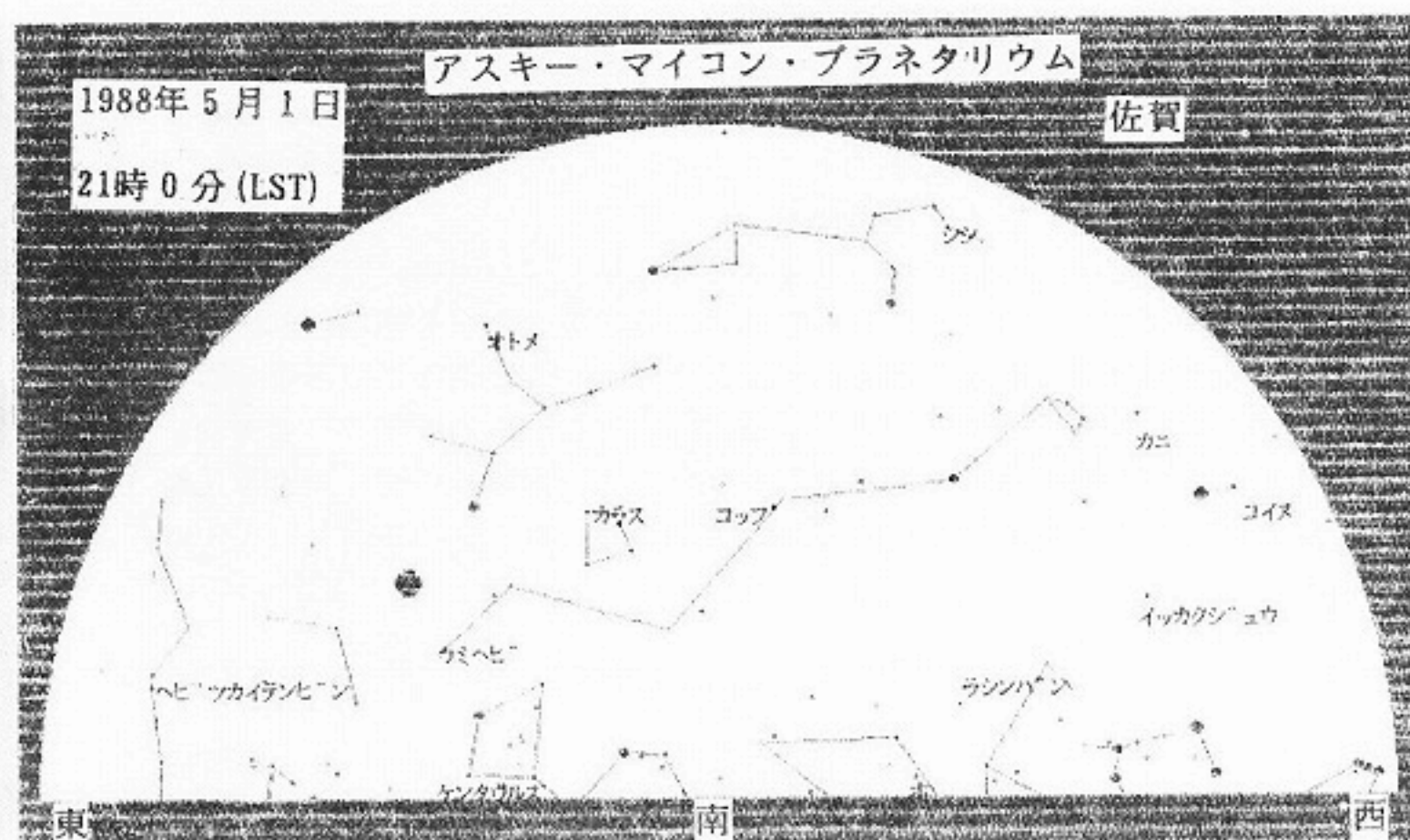
座絵では女はスピーズ星雲が1万星やガスから星雲といふに太陽は地球大な集合体であるのです。まると、光を半するのです。ていうわけのいくつかを造るはあの大蜘蛛の時にヒドクしたあたとされてす。この星の双眼鏡等星座その

「うみ蛇座」は先のプレセペ星団の南15度のところに小さな星（4等～5等）が五つほどこぶしをにぎった形にひとかたまりに並んでいて、それが「うみ蛇」の頭とされています。それからコップ座の南を通り、からす座を通して夏の星座のてんびん座近くまで来ている。名前のごとく長い星座です。この星座はうみ蛇と呼ばれていますが、ギリシャ神話では先程「かに座」で出て来た水蛇（ヒドラ）になります。

「かに座」のところで申しましたとうりヘラクレスに殺されてしまいました。その蛇の血に少しでもふれたら、どんな者でもすぐ死んでしまうという猛毒で以後ヘラクレスはその血を矢の根にぬって戦った為、もう彼の矢おもてに立つものはいなくなつたといわれています。

「カラス座」この星座は乙女座の南の方に四辺形に並んだ小さな星（3等星）で出来た星座です。ここで星の明るさについて簡単に述べますと、空のよく澄んだ場所で肉眼で見えるか見えないかという星を6等星として、それから少しずつ明るい星を5等、4等と順次にきめ一番明るい星を1等星として表わしてあります。そして1等星は6等星の100倍も明るいということで、金星とか月のようにさらに明るい星はマイナス（-）何等といった表わし方をします。ですから前に述べた小さな星というのは明るさが小さいという意味として読んで下さい。

話は「カラス座」にもどりますが、このカラスは大変オシャレで羽は銀色にかがやいていて、そのうえ人間の言葉を話すことが出来るというかしこさだったので太陽の神アポロンの使者の役をさせられていたのです。ところが彼はひどくおしゃべりで、そのうえそをつく欠点がありました。ある時アポロンの使いにひどく道草をしてそのいいわけにアポロンの妻が他の男と浮気をしていたと告げました。怒りにくるったアポロンは迎えに出て来た妻を相手の男と勘違いし一矢のもとに射殺してしまいました。ところがカラスの話がまったくのでたらめとわかり、そのばつとして見せしめの為カラスから銀色の輝きをうばい黒にかえ、人間の言葉も話せなくして、星座にさらしものにしたということです。



「うしかい座」この星座は北斗七星のひしゃくのえを延ばした方向にあります。そしてその中の一番明るい星がアルクトウルスという1等星で、その名の意味は熊の番人という意味です。それはちょうど大熊（座）の後からついて廻っているように動くからだそうです。この星は1等星でも明るい方で、全天で4番目に明るくて距離は37光年のところにあります。そして直径は3,200万Kmと推定され、太陽の25倍もの大きさがあります。もし太陽がそのように大きく成ったら地球の表面は灼熱地獄の世界になってしまうでしょう。然し今から50万年もたつと、ほとんど肉眼では見えなくなる位遠ざかってしまうということです。

次は「かみのけ座」です。この星座は「獅子座」と、牛かい座の間にあり、又南の方には乙女座があります。この両星座に連なって星雲群があり、宇宙の構造を研究するのに重要な場所です。星座の伝説はエジプトの王エウエルゲテースの妻がアッシリアの遠征で勝利した記念にその美しい髪を大神ゼウスにささげたのでそれを天にかざったということです。

「りょうけん座」この星座はわりに小型の星座で大熊座と牛かい座の間にあり神話では牛かいの巨人が2匹の獵犬で大熊をかりたてている、その2匹の獵犬が、この星座です。

「かんむり座」この星座は牛かい座の東側にあり、神話では失恋して海に身をなげようとした王女アリアドネを酒の神バッカスが救い自分の嫁にしたが、後で彼女が死ぬと彼女の冠を大空に投げ上げたら、もともと美しい宝石で出来ていた為それはたまたまどこかに美しい冠の形が星座になったといわれています。実際には2等星が1個と4等星が6個の名前通りに半円形に並んでいかにも王冠のような形になっている美しい星座です。

「コップ座」この星座はうみへび座の上にカラス座と並んで乗ったようになっている星座で、神話では持ち主が何人もあって、持ち主により色々いわれていますがその内の一人コルクスの王女で魔法使いのメーデアの場合は彼女の夫の父を老衰からよみがえらせる為に、月夜の霜やふくろうの首などと薬草を煎じた時に使った鉢とされていますが、あまり、目立たない星座です。

以上で春の星座について簡単に述べましたが、ぜひ実際に星空を見ながら以上の話を思い浮かべて下さい。その際、手持ちの双眼鏡で星空を覗かれるのも肉眼で見ると異なり別の世界を発見できるかも知れません。もし新たに双眼鏡を購入されるのであれば、7倍×50mmや7倍×35mm程度の比較的低い倍率のものが使い易く又バードウォッチング等多目的に使えるのが便利です。双眼鏡の他に星座早見盤（なるべく平面ではなく皿型がよい）を用意して星空を見られると一層楽しいものとなると思います。

ドブソニアン 個人輸入始末記 (なんてったって 44Cm)

副島 勉

(プロローグ)

'87, 2, 5 (木) PM4:25 場所は佐賀市水ヶ江1丁目、
佐嘉神社前交差点付近。

『それは悪夢であった』

ほんの数分前までは元気ハツラツ オロナミンC !!

世の 有職者, ジブシー, 貧, この十分条件を満たす星見人は特に夕方の終業
前の時間帯, 加えて週末に近づきつつある週後半というのは, この週末はどこに
遠征しようか, なんの写真撮ろうか, いや今回は眼視でゆっくり観望に徹するか,
雨が降れば久し振りに機材の手入れでもしなくては, 油断していると 「カビご
一行様」が大挙おでましになっていたりして取り返しの付かない事になったら
マズイ, 等 あれこれ思いを巡らし楽しい時間帯なのでありまして, これもまた
心うきうきオロナミン!!なのであります。

オロナミンの宣伝をしているように見えますがなにも大塚製薬の社員と言うこと
でもないし またジャイアンツのファンでもない。

ひいきの球団からいえば, 元気ハツラツ (は) のソーセージ と言うことに
なるが ウ, ウーン やっぱりさまにならないな

話が脱線してしまったが脱線ついでに, 中部さーん ホエールズのシンボル
マークを鯨座にしたらどうですか?

「ソエジマ君, 君はなにをいっておるのかね, ギリシャ神話では, クジラは英雄
ペルセウスに石にされて海に沈められたのを知らんのかね, 沈みっぱなしじゃ
どうしようもないだろう, それとも我が球団に対しての皮肉かね,
まったくどうしようもないね君は, すこしギリシャ神話でも勉強したまえ」
以上中部オーナーの話 こやどうもすみませーん

因に私のライフワークはミラの変光度と横浜大洋ホエールズの勝率との相関関
係を研究中でありまして, 私の予想ではペナントレースの覇者が決まるのは大体
毎年10月初めであるからして, その時期にミラが最大光度となるのは,
1990年 故に '90年のペナントは

我が 横浜大洋
が勝ち取るという図式が成り立つわけでありまして。

話を元に戻して 元気ハツラツオロナミン の後に

そうは問屋が卸さなかった, と続くのでありました。

数分後には苦痛にゆがんだ顔に血の気は無く、集まった野次馬の視線を一点に浴びても恥ずかしさも感じず、痛みが少し治まったところで我が右足をみると、先週西友で買ったばかりの無印良品のツイードのスラックスは見るも無残に破れ、太股はパンパンに腫れ上がりおまけに曲がっている！！

ナ、ナニー 曲がっている

本来まっすぐのところが曲がっていると言うことは

ジャジャーン 骨折

かくして右大腿骨骨折にて6カ月間の入院生活と相成ったのであります。

第1章

『何かいいことないか円高差益』

約1カ月間の牽引のあと 2/27 '87の骨折部の接合手術も終わり
毎日1冊の割合で読んでいた書籍類もそろそろペースダウンし始めた4月の初旬

世は折しも財テクブーム、株価の連日の高値更新に加え円高ドル安も一段と進み、
まだメーカーで輸出業務に携わっていたつい半年前なら夜もおちおち寝られぬ思
いだったろうにと後任の Mr. K の心痛を案じながら

さてよ、

円高 = 輸出に不利 = 輸入に有利 a

輸出入業務を少しかじっている + 通関業者に知人がいる b

a + b = 個人輸入

と言う式が成り立つではないか

O. D派の小生としては、エディーバウアのオールパーパスジャケット に
しょうか、L. L. ビーンのハンティングシューズ にしょうか、それとも
ガーバーのフォールディングナイフ にするか、さてよナイフは輸入出来るの
かなー

輸入するには、まずカタログを取り寄せねば、O. D. 雑誌に確かREIの
P. R. があつたなー等、夢を膨らますことになったのであります。

折りもあり、我が佐賀天文協会の古賀会長が、「ソエジマさんどぎゃんね足の具合は、何一もすつことの無くて思うてアメリカの天文雑誌ば持って来たよ」とばかり Sky & Telescope 誌 を持参下された。

そして曰く、「マゼラン星雲の SN1987a の記事の載っつけん
チョチョイと訳してくれんね、会報に載しゅうで思うとっけん」

ジョーダンじゃ あ り ま し ん

小生ごときの英語力で専門誌を翻訳し、会誌に掲載する等おこがましい、
だいいち日本語さえも文を書いたり読んだり、国語辞典が不可欠なのに
チョチョイと訳せるわけがない。

小生同様外国語が少ししか出来ない方はご理解頂けると思うが、
文全体の大意は理解できるものの、それを文章にするにはこれは文才が無ければ
どうしようもない。

又、会話にしても自信を持って接した外国人との間で全く話が通じず自信を
無くしたと言うご経験の方もおられるのでは、

とにかくそう簡単なものではありません

話を戻して、まあ折角持参頂いたのだからと S&T 誌 に早速目を通して
みると、確かに S. N. 1987a の記事や、自作の機材の記事等、なかなか
面白い。

これらの記事に混じり、TeleVue, Lumicon, Coltor 等
のメーカー、販売店の広告が目をついた。

「えーと、ルミコンのデープスカイフィルター48mmが \$119.5,
\$1を150円として¥17,925。

ナニナニ

クルターオデッセイ II (44cm) \$950.0, ¥142,500. -

”ヤスーイ”」

「 ” ” 個人輸入はこれだ ” ” 」

一人叫んだのであります。

次号は 第3章 「カタログ入手大作戦」 及び

第4章 「早くこいこいドブソニアン」です

(1) 序文

最近、仕事が忙しくなかなか天体観望にも行けない、いや、行く元気と若さが乏しくなったというのが正しい表現でしょうか。本来、この会誌は天文同好会の会誌ですので、天体観測した記録や天文機材についての報告などを載せるのが正道ですが、邪道とは知りながら何とか、デスクワークだけで原稿が出来ないかと思いつつ考え出したのがこの標題です。過日、葉隠を拾い読みしていたところ、「箒星」の二文字が目につきました。そこで、その項を良く読んでみると天文に関してなかなか面白い内容でしたので、ここに紹介を兼ねて独断と偏見に満ちた解説文を載せたいと思います。尚、資料不足の為、時代考証が充分でない箇所がありますので今回は原文の現代文訳と簡単な解説に留めたいと思います。

(2) 葉隠について

「葉隠」といえば佐賀の代名詞として使われる程、有名な書物ですが一応、その概略を述べてみたいと思います。

「葉隠」は佐賀藩二代藩主・鍋島光茂に仕えた山本常長（1659～1719・出家しての名を旭山常長）が、後輩の藩士、田代陣基に1710年から1716年までの7年間にわたって語った言葉を田代陣基が丹念に筆録し、また他の人から聞いた話や、陣基自身で調べた事などをつけ加えて十一巻に編纂したものです。十一巻の中には有名な「武士道とは死ぬことと見つけたり。」に代表される武士道の心構えを中心に、藩祖鍋島直茂から第三代藩主鍋島綱茂までの歴代殿様の言行および佐賀藩諸士の言行など、約1,290項の話から成っています。その内容は実に多彩で、どこから読んでも一話完結形式なので割と気軽に読めます。とはいってもそれは口語訳したものであって、原文で読むとなるとかなりの難物です。「葉隠」については専門書の解説書も多数出版されていますので詳細についてはそちらを参考にしてください。



山本常朝の墓（竜雲寺）

葉隠聞

常に

重出・新

陰陽の道

いふべし

ては何事

来する也

(注釈)

* 何事の

* 月日重

* 箒星・

以上、

葉隠」の

(4) 葉

・現代語

異常な

言うのは

六月の雪

られるも

西に沈

ことだ

になび

くり出

が起き

現代語

ふだん

と若さが
同好会の
るのが正
ないかと
ところ、
と天文に
に満ちた
い箇所が

一応、そ

重出・箒星・旗雲・光物・六月雪・師走の雷などは、五十年、百年間に有^{ある}事也。

いふべし。是に替る事なし。又天変之有時、^{またてんべんこれあるとき}世上に^{かならず}必惡事^{いでく}出来る事は、旗雲を見

来^{たい}する也。怪事^も用^{もちい}やうに口伝之有也。

*月日重出……日と月が同時に見られること。

* 箒星・旗雲・光物……彗星、旗のようになびいている雲、流星。

以上、岩波書店発行 相良亨・佐藤正英校注「日本思想体系26 三河物語・葉隠」の249ページより引用。

童雲寺

異常な現象が起きると、それを怪事として、何事の前兆であろうかとあれこれ言うのは愚かなことだ。太陽と月が同時に見られること・彗星・旗雲・光り物・六月の雪・十二月の雷などというものは、五十年や百年の間にはたまには見うけられるものである。天地の運行の次第によって現われるものだ。太陽が東から出て西に沈むことも、いつものことでなかったら怪事ということになる。それと同じことだ。また天変あるとき、世の中にならず悪いことが起きるのは、旗のようになびく雲を見て、何事か起きるに違いないと、人々が自分で心の中に怪事をつくり出し、悪いことが起きるのを期待するので、その心のもちようから悪いことが起きてくるのである。

ふだんにないことが起これば怪事と言って、何事かの前兆かもしれないとさわ

ぐのは愚かなことである。

太陽と月が同時に見られたり、彗星、旗雲、光り物、六月の雪、十二月の雷など、五十年百年の間にはありうることである。陰と陽のめぐり次第で出現するものだ。太陽が東から出て西に沈むことも、普通のことではなかったら怪事ということになる。これと同じことだ。また天変あるとき、世の中にきまって悪事が起きるのは、旗雲を見ては何事か起きるぞと、人々が自分で心の中に怪事をつくり、悪事を待つから、その心の持ちようから悪事も起きて来るのだ。

怪事を利用した昔話もあることだ。

(5) 「葉隠聞書1-104」の中に出てくる天文現象

前掲の原文と現代語訳を読んで頂ければ、この段の大意は理解できると思います。この段を読んで驚くことは、山本常朝の物事の諸現象に対する確な判断を下していることです。つまり、山本常朝は三百年も前の江戸時代に今風で言えば、「科学的考察力」を持っていたということです。それに比べたら、今日、これだけ科学技術が進み、また殆どの人が高等教育を受けているはずの日本でも、科学もどき屁理屈を利用した流言飛語を本気になって信じている人が多数いる事自体「怪事」と言えるかもしれません。最近では、「惑星直列」・「ノストラダムスの大予言」・「富士山大爆発」・「ハレー彗星大接近」等、色々ありました。

さて、肝心の天文現象ですが、原文を見ても分るとおり、「月日重出」、「彗星」、「光物」の三つです。以上、三つの現象については後段で各項ずつ解説を加えたいと思います。尚、原文中にある「旗雲」は気象現象で原文注釈にある様に「旗のようになびいている雲」と解釈しますが、実際は彗星のことを旗雲として記述している記録もあるそうです。

葉隠の原文を読む限り、これら三つの天文現象を山本常長自身が実際に目撃し、かつ、一般民衆が動揺して騒ぎになった事を体験したと考えるのが自然だと思います。この「山本常長自身が実際に目撃した」という事が、この段を解釈する上での重要なポイントとなります。

ところで蛇足ながら、江戸時代の人々は珍しい天文現象があると「怪事」として大騒ぎになった様子が分りますが、現代の天文ファン達でも、さしずめ「快事」としてやはり大騒ぎになるのは間違いないでしょう。

(6) 「月日重出」について

まず「月日重出」の解釈ですが、岩波書店発行 相良亨・佐藤正英校注「日本思想体系26 三河物語・葉隠」(以下、岩波版と略します。)の注釈では前述の通り、「日と月が同時に見られること。」となっています。現代語訳の方はどうかというと、中央公論社版も教育社版も「日と月が同時に見られること。」

となっています。

ここで、少しでも天文に興味と持っている者なら、これらの解釈にすぐに疑問を持つ所です。第一に、「日と月が同時に見られること。」という現象は私達がよく目撃することで、西に太陽が傾いた時は半月以上、つまり上弦の月であれば楽に見ることができますし、明け方の中空に下弦の白い月が見えたりする事はよくあることです。要するに、この現象は日常茶飯事に目撃される事で、珍しくとも何ともないということです。第二に、いくら江戸時代とはいえ、日と月が同時に見えたくらいで、誰も畏敬の念や、恐怖感を感じなかったはずです。以上の理由から、「日と月が同時に見られること。」の解釈では葉隠のいうところの「怪事」には役不足であると思います。

それではどういう解釈が正解でしょうか。実は、佐賀天文協会の星仲間にこの原文を見せたところ、皆、異口同音に「ああ、これ日食のことね。」と答えました。多分、少しでも天文をかじったことのある人なら、「月日重出」の文字を見れば、ほとんどの人が日食のことと気付くと思います。尚、正確には「日蝕」ですが、ここでは「日食」と表記します。

日食が葉隠で云う「怪事」と断定しましたが、同じ日食でも浅い部分日食ではやはり役不足です。昨年9月23日の沖縄金環日食を佐賀で観測した経験によれば、この時の佐賀での食分が約0.79とかなり深い部分日食であったにも拘らず、空が若干薄暗くなったかなというぐらいで、日食の予報を知らない人は全く気付かない程度の変化でした。一方、沖縄に遠征した佐賀天文協会のメンバーである割島・八谷の両氏の報告によれば、食分0.97の沖縄金環日食ではかなり空が暗くなり、気温の急激な低下も体感し、神秘的雰囲気は充分にあったそうです。よって、「怪事」と呼べる様な日食は、皆既ないし金環日食、もしくは食分0.90以上の深い部分日食に限ると思います。

(7) 山本常朝の見た日食

前段では、文章上からだけの解釈で山本常朝の見た「怪事」は日食と断定しましたが、その推論が正しければ、山本常朝が生存していた間に食分0.90以上の大きな日食が佐賀で見えたはずで、そこで、史料を捜して見たところ、山本常朝の生存期間(1659~1719)の期間に少なくとも2回の大きな日食が佐賀で見えた可能性がありました。勿論、ベタ曇りの曇天では「日食」という「怪奇現象」を見ることは出来なかったでしょうが、当日の佐賀での天候や日食の見え具合などは当時の記録を調べていないので何とも言えませんのでこの件については、次回の宿題にしたいと思います。

ところで、山本常朝の見た可能性のある大きな日食とは、次の2回です。

表 1-1

旧 暦	西 暦	時刻	山本常朝の年齢
寛文6年6月朔日	1666年7月2日	夕方	7歳
正徳2年6月朔日	1712年7月4日	明け方	53歳

(8) 「彗星」について

彗星は注釈のとうり、彗星で問題ないと思います。ただ、望遠鏡が普及していますが、このなかった江戸時代に、一般庶民が大騒ぎするくらいの彗星となるとよほど大きな彗星になる程彗星でないと印象が薄いと思います。そこでまず思いつくのは、例のハレー彗星ですが、山本常朝の生存期間中（1659～1719）、ハレー彗星は天和2年（1682）星雨位だに出現しています。この時のハレー彗星は尾の長さ10°ないし15°でハレー彗星としては特別、大きく見えた訳ではなかった様です。

前述のハレー彗星でもなんとか「怪事」と呼べる程の彗星でしたが、記録を調べてみると、このハレー彗星出現の2年前に超横綱級の大彗星が出現しています。その彗星とは「キルヒの大彗星」のことで、延宝8年（1680）ドイツの天文学者キルヒによって11月14日早朝、東の空で発見されたものです。一旦、10°位の尾をひいて太陽に接近して見えなくなり、12月20日過ぎには長大な尾をひいて西の空に現われました。その尾は70°ないし90°に達した程の大彗星で、その後約2ヶ月の間、肉眼で観測されたそうです。これだけの大彗星となると世界中にその観測記録が残っており、勿論、日本にも「武江年表」を始めとして多数の詳しい記録が残っているそうです。

他に、人目を引いた可能性のある彗星としては、元禄2年（1689）尾長60°に達して2週間見えていたといわれる彗星。それに元禄12年（1702）尾長30°ないし40°に達して約10日間見えていたといわれる1702年第1彗星の二つ位だと思います。

以上、山本常朝の見た可能性のある彗星を四つピックアップしましたが、彗星の尾長の規模、記録の量、更に肉眼で見えていた期間などを考慮すると、やはり「キルヒの大彗星」が図抜けて大きく、明るかった彗星であったことが推測されます。ちなみに、この時の山本常朝の年齢は21歳、そしてこの年、山本常朝が師として尊敬していた湛然和尚が亡くなっています。また、この年、佐賀藩は大飢饉に見舞われていて人々はこの「キルヒの大彗星」を凶星として恐れ、おののきながら眺めていた様子が想像できます。それだけに、山本常朝にとっては「キルヒの大彗星」の印象が一番強かったのではないのでしょうか。

実は、この「キルヒの大彗星」の記録は佐賀藩にも記録が残っているそうです。この記録が残っているという事が分ったのは、2年前、例のハレー彗星ブー

の年齢

7歳

53歳

ムの時、多久の古文書研究家から佐賀天文協会の会長の古賀さん宅に「手元にある多久邑(ゆ)の古文書に彗星の記録があるが、ハレー彗星ではないだろうか。」との問い合わせがあったそうです。記録の年号を調べた所、残念ながらハレー彗星ではなかったのですが、この彗星の正体は前述の「キルヒの大彗星」であった事が判明したのです。筆者自身、この古文書を見ていないので何とも言えませんが、次の会誌の発行までにはよく調べて、面白い内容の紹介をしたいと思います。

(9) 「光物」について

「光物」の解釈について、稲妻や落雷の事を光物と表現した記録もあるそうですが、ここでは素直に注釈の通りに、流星で正解と思います。ただし、人々の噂になる程の流星となると、昼間の様に明るく輝く大火球や、大音響を伴って落下してくる隕石が想像できます。他に考えられるとすれば、花火の様に見える大流星雨位だと思います。

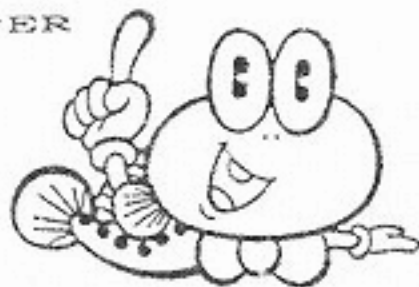
この「光物」をUFO研究家が解釈すると、「山本常朝はUFOを目撃していた。」となる訳ですが、UFO説は少々奇抜すぎるので、大火球説もしくは大流星雨説を私の解釈としておきたいと思います。

(10) 次号掲載文の予告

次号も引き続き、「葉隠と天文現象」という題で拙文を掲載したいと思います。その内容は、今回、簡単な解説で済ませた「山本常朝の見た日食」の項を更に詳しく掘り下げて研究(?)した物になる予定です。特に、目玉としてはパソコンを利用して山本常朝が見たであろうところの日食のシュミレーションを描く事です。現在、佐賀天文協会の会員である副島さんに最新鋭機PC-9801VM21と「マイコン・プラネタリウム」を改良したソフトを駆使して、その作業を進めてもらっているところです。試験的にシュミレーションを試みたところ、期待通りの日食が画面に出ている様です。

次々号では、「キルヒの大彗星」の観測を記録している多久邑古文書の調査結果と「葉隠と天文現象」のまとめを載せて終りにしたいと思います。

尚、今回も参考文献を多数使いましたが、毎回紹介すると煩雑になりますので最終回の次々号にまとめて掲載したいと思います。



お盆

TRADITIONAL ACTIVITIES IN JULY

TANABATA

Tanabata is a Star Festival held on the night of July 7. It originated in China and was introduced into Japan in the middle of the Nara Era (710-784). It is a festival held in celebration of a legend of two stars. According to this legend, two stars in love, the Weaver Star (Vega) and the Cowherd Star (Altair), residing on opposite sides of the Milky Way, were allowed to meet just once a year.

According to Chinese legend the Emperor of Heaven saw one of his daughters, the Weaver, working at her loom by the Milky Way or the Heavenly River by herself. He felt sorry for her and married her to the Herdboy (Altair) living on the other side of the Heavenly River. Then she stopped working at her loom. The angry Emperor made the Weaver return to the old place. She was allowed to meet her dear Herdboy only on the eve of July 7.

On the occasion of this festival, fresh bamboo branches are set up outside homes, from which long slips of paper and colourful paper decorations are hung. Romantic poems and wishes are written on the slips of paper.

In large cities this festival is held on July 7, but in many local towns on August 7, according to the lunar calendar. The most famous are the star festivals in Hiratsuka, Kanagawa Prefecture, on July 7, and in Sendai City on August 7. Main streets are filled with huge bamboo branches decorated with fancy colourful streamers and other oddities.

Although the Star Festival is not celebrated in Saga, many people will celebrate by decorating the front of their houses with bamboo.

An interesting side-note to this festival is that in Japan, previous to the introduction of the Star Festival from China, Japanese celebrated July 7 with sumo matches, the results of which told the fortune of the year.



THE STAR SONG

Sasa no ha sara-sara, nokiba ni yureru
Ohoshisama kirakira, sora kara miteru.
Goshiki no tanzaku, watashi ga kaita,
Ohoshisama kirakira, kin, gin, sunago.

The bamboo leaves are swinging in the wind,
Up in the sky stars are twinkling and looking down upon us.
I wrote my wishes on the paper strips,
A great many stars are in the sky, gold and silver.

★ 佐
第2回

第3回

今後の

となっ

・ やっ
米な
県の
年間

・ やっ
約8
た。
ベル
正に
ても

・ 古賀
文化
いま

・ ドッ
ーナ
報誌
た。新

「佐賀
発行
連絡先

★ 佐賀天文協会主催行事開催報告

第2回星空観望会	日時	: S63-1-9 (18:30~ 21:30)	晴れ時々曇り
	場所	: 旧西賀与小学校跡	
	参加者	: 約80名	
	協力	: 佐賀医科大学天文部	
第3回星空観望会	日時	: S63-4-16 (19:00~ 21:30)	晴れのち曇り
	場所	: 旧西賀与小学校跡	
	参加者	: 約100名	
	協力	: 佐賀医科大学天文部	
今後の行事予定は	8/13~8/14	第5回星空キャンプ	
	9/15	火星観測会	
	11/3	第4回星空観望会	

となっております。会員各位の御協力をお願い致します。

(副島)

編集後記

- ・ やっと出来た、「佐賀天文」No. 8。とにかく去年はとうとう一回も発行出来なくて、会員諸兄には勿論、定期的に高レベルの会誌を送って頂いている近県の天文同好会の諸団体関係者に深くお詫びします。年内にあと2回発行して年間4回発行体制を目指したいと思います。
- ・ やっと来た、44cmドブソニアン望遠鏡。今、流行の個人輸入で購入した物で約8ヶ月掛かりました。肝心の見え味ですが、これが予想以上によく見えました。今まで小口径の望遠鏡をいじくり回していた編集子にとっては、まさにコペルニクスの意識変革をもたらしたのでありました。とにかく、星雲・星団は正に天体写真の世界なんですよこれが……。詳細については副島さんに連載してもらおうことになっていますので御期待下さい。感謝・感激の円高です。
- ・ 古賀会長、執筆による「見上げてごらん春の星」は、佐賀県文化課発行の総合文化誌「新郷土」3月号に掲載された文章ですので、内容が素人向けになっています。会誌の発行が遅れた分、少々、季節はずれになってしまいました。
- ・ ドッキリ英文の「TANABATA」(七夕)は佐賀県の国際室囑託のシルバーナさんというオーストリア人女性が編集している佐賀在住の外国人向けの情報誌「MUDSKIPPER」(ムツゴロウの意味)から転載させて頂きました。編集子でも辞書無しでどうにか読めました。

(園田正樹)

「佐賀天文 No. 8」 1988年8月8日発行
 発行者/佐賀天文協会会長 古賀利幸
 連絡先/〒840 佐賀県佐賀市唐人1-5-43 ☎ 0952-24-3043

